

ヒューマンライブラリーの実践 多文化共生社会を生きるためのスキルを養う場として

関 久美子

The Practice of Human Library As a Place to Develop Skills for Living in a Diverse Culture Compatible Community

Kumiko Seki

1. はじめに

今年で8年目となる新潟青陵大学 新潟青陵大学短期大学部 社会連携センター（以下、青陵社会連携センター）主催の「インクルージョン講座」では、多様な背景を持つ人々が共に社会で暮らしていくために「ふわりとつつむ」をテーマに市民、学内教職員、学生を対象に企画講座を開講してきた。ヒューマンライブラリーもその講座の1つとして2018年に第1回目を開催し、今回で6回目を迎えた。ヒューマンライブラリーは、「障がい¹をもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は1対1で、あるいは1対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』（イベント）である」（横田2012, p.155）。この取り組みを通して、多様性への理解や社会の偏見の低減を目指す。

新潟では新しい試みであったヒューマンライブラリー開始当時は多くの人々の関心を集めたが、その後はコロナ禍で条件付きでの開催を余儀なくされ、主催側としては苦悩の時期であった。今回のヒューマンライブラリーは、2020年、2021年のオンライン開催、2022年の事前予約制で参加人数を制限しての対面開催を経て、2023年11月5日（日）に「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO～あなたを知ってわたしを知りたい～」と題し、コロナ禍後はじめて一切の規制を無くし、従来の方法で開催された。

本稿では、ヒューマンライブラリーの運営にあたる青陵学生司書プロジェクトの活動報告、2023年度のヒューマンライブラリーの実践報告とともに、ヒューマンライブラリー後に行われたふりかえり会での参加者の特筆すべきコメントを取り上げ、今までとは別の視点から、ヒューマンライブラリーが目指すもの、そしてそこで私たちが得られる、あるいは得るべき多文化共生社会を生き抜くためのスキルに

¹ 「障がい」「障害」の表記に関しては様々な見解によって議論がなされるが、本稿では原則その言葉を使用した者が記した表記に従い、それ以外は「障害」の表記を使用する。

ついて論じることとする。なお、これ以降はヒューマンライブラリーにおいて、多様な背景を持つ語り手を「本」、参加者である聴き手を「読者」、主催者側の学生スタッフを「学生司書」とする。

2. 青陵学生司書プロジェクト

2-1. 事前学習

図書館運営には司書が必要である、ヒューマンライブラリーでもその企画・運営をする主催者を「司書」と呼ぶ。青陵では青陵学生司書プロジェクトを立ち上げ、筆者のゼミ生である新潟青陵大学短期大学部人間総合学科2年生10名を中心に、有志として新潟青陵大学福祉心理学部臨床心理学科2年生1名、3年生1名、4年生3名、同学部社会福祉学科3年生1名の学生、計16名が「学生司書」としてこのプロジェクトに参加し、ヒューマンライブラリーの準備や当日の運営にあたった。この活動は先進的な教育方法の開発・取り組みとして「新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金」を継続的に獲得している。

ヒューマンライブラリーでの「学生司書」の大きな役割は「本」の一番の理解者になり「本」を守ることである。前期は筆者のゼミを中心に、偏見や差別のメカニズムやヒューマンライブラリーの仕組みや意義について学ぶ座学の後に、学生がそれぞれ「本」「読者」役となり、ヒューマンライブラリーのデモンストレーションを行った【写真1】。「本」役の学生は過去の辛い体験や今感じる生きづらさを「読者」役の学生に語る。「本」役を経験することで、実際に「本」がヒューマンライブラリーで初対面の「読者」に対し、自身の負の経験や想いを開示することの難しさと勇気について体感する。また「読者」が自分の話に耳を傾けて、それを肯定的に受け入れてくれることの重要性に気づくことができる。「読者」役の学生は積極的に聴く、質問をする、自分の考えや感じたことを述べるという練習になる。

その後一部を除き6月～7月にかけて、まずは自分たちが社会の多様な属性について学ぶために、実際にヒューマンライブラリーで「本」になっていただく方々をゲストスピーカーとして、また専門家を講師として迎え勉強会を行った【表1】。ここでも実際のヒューマンライブラリーのように学生が「読者」役となり「本」に語ってもらう。勉強会では「本」の属性を学ぶとともにコミュニケーションを深め信頼関係を築いていく【写真2】。また「本」からも「学生司書」にどうあってほしいかといった意見を聞き、「司書」としての心構えを学ぶ機会とした。

【写真1】



【写真2】



【表1】

月日	授業形態	テーマ
6月8日	オンライン	・慢性疲労症候群・獣医師 ・全身タイツ・トウキョウゼンタイスタイル
6月14日	対面	・自傷行為・リストカット ひきこもり・アルコール依存症
6月21日	対面	・中途失聴 ・双極性障害・発達障害
6月28日	対面	・心の病・摂食障害 ・デートDV
7月5日	対面	・発達障害・パンセクシュアル ・発達障がい・軽度知的障がい・解離性同一障がい
7月12日	対面	・乳がんサバイバー ・不定性Xジェンダー・パンセクシュアル
7月19日	対面	・中途四肢麻痺 ・脳性まひ・車いす
12月6日	対面	聴覚障害の「聞こえ」について・手話講座

2-2. 課外での活動

ヒューマンライブラリーに関連する活動として、「学生司書」は2つの活動に参加をした。1つ目は2023年7月に新潟日報メディアシップで開催された青陵社会連携センターが主催する一般市民向けのサイエンスカフェ²への参加である。ここでは筆者が話題提供者となり「多様性」をテーマに「哲学対話で考える：『違い』を認めるってどういうこと」と題し、参加者が4～5人のグループで自由に対話をする。その対話のファシリテーター役として5名の「学生司書」が参加した【写真3】。ヒューマンライブラリーはまさに「違い」と出会う場であり、「学生司書」たちはすでに事前学習を通して多様な「違い」と対峙してきている。そのような自分たちの経験を踏まえ、「学生司書」たちは非常に生き生きとした表情で学外の一般参加者と対話をする様子が見受けられた。

2つ目は、2023年9月に行った新潟青陵高等学校の広大連携コース、特進コース1～3年生約100名を対象としたヒューマンライブラリー事前授業である。この授業には「学生司書」13名と、「学生司書」OGであり「本」としての経験もある2名が参加した。今回で2回目となるこの事前授業では、筆者がヒューマンライブラリーの概要、多文化社会における「違いを知る」ことの重要性、マイクロアグレッション等について講義を行ったあと、「学生司書」OGの2名がこの活動に関わるきっかけや意義などを話した。次に、ゲストとしてお越しいただいた琉球大学の波名城翔先生より、沖縄でのヒューマンライブラリーの活動研究や、今後ヒューマンライブラリーを小・中学校へ普及させていく取り組みなどについてご紹介いただいたのち、「学生司書」1名より「学生司書プロジェクト」で学生がどのような活動を行っているか、活動における重要な点、またこの活動を通しての学びについて発表した。最後に高校生を7～8名のグループにわけ、各グループに「学生司書」1名がファシリテーターとしてつき、11月に行われるヒューマンライブラリーの「本」の紹介や、どの「本」に興味があるか、それはなぜかなど、また質疑応答も含めグループトークを行った【写真4】。生徒からは「パンセクシュアル」や「統合失調

² 「サイエンスカフェ」とは、専門家や一般の人々がカフェの雰囲気の中で、科学や専門分野について気軽に語り合う場である。社会連携センターでは青陵大学・青陵大学短期大学部の各学科の教員が話題提供者となり定期的にサイエンスカフェを開催している。(https://www.n-seiryu.ac.jp/extension/ec/#co_004)

【写真3】



【写真4】



症」といった耳なじみのない「本」の属性について積極的に質問もあり、「学生司書」にとっても自身の活動を振り返り、ヒューマンライブラリー本番に向けてさらに邁進する良い機会となった。

2-3. 「本」の「あらすじ」作成

「学生司書」は夏休みを利用し、「本」へインタビューを行い、「本」の紹介文である「あらすじ」を作成した【写真5】【写真6】。「読者」はこの「あらすじ」をもとに対話する「本」を決定するため、「学生司書」たちはいかに自身が担当する「本」を選んでもらえるか考えながら、「本」が語るライフストーリーを自らの言葉で再構築する。その後も「本」とのやり取りを通して、「障害」を「障害」とするか「障がい」とするかといった表記の確認や、内容に齟齬がないかなどチェックを行う。その過程で「学生司書」が「読者」に「本」の魅力として伝えたい内容と、「本」が「読者」に伝えたいことに食い違いが生じることもある。些細な表現方法の違いでも「本」にとっては自身のアイデンティティに関わる重要なことであり、修正を依頼されることもある。それは「学生司書」にとって、ある種の葛藤を抱える作業となるが、これは「あらすじ」作りにおいては想定内であり、真に「本」を理解するためには乗り越えなければならない葛藤である。「本」との細かいニュアンスのすり合わせの中で、「学生司書」は「本」の想いを受け取りながら、「読者」に向けた「あらすじ」を作成し、ヒューマンライブラリー本番を迎えた。これは松下（2015、p.23）が「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経

【写真5】



【写真6】



験と結び付けると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」と定義するディープ・アクティブラーニングの実践に繋がっている。なお、「学生司書」が作成した2023年版の「あらすじ」は青陵社会連携センターのホームページ上³で閲覧できる。

3. ヒューマンライブラリー 2023実践報告

2023年11月5日（日）に「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO～あなたを知ってわたしを知りたい～」と題して、第6回目となるヒューマンライブラリーを新潟青陵大学 新潟青陵大学短期大学部にて開催した⁴。20名が「本」として参加し、そのうち6名が初参加の「本」であった。12時30分から16時までの間に15分の休憩を入れ30分の対話のセッションを5セッション設置した。当日は76名が「読者」として参加し、予定していた65セッションすべてをキャンセルすることなく実施することができた。当日の対話のスケジュールは【表2】の通りである。

【表2】 ①12:30-13:00②13:15-13:45③14:00-14:30④14:45-15:15⑤15:30-16:00 ○印 セッション開催

	キーワード	「本」のタイトル	①	②	③	④	⑤
本A	#中途視覚障がい	外の世界で“見えない”からこそ“見えたもの”	○	○		○	
本B	#自傷行為	腕の傷は私の生きていた跡 ～「やめる」じゃなくて「やめ続ける」～	○	○		○	○
本C	#デートDV	私のすきなひと ～あなたは今、幸せ？～		○	○		○
本D	#心の病・摂食障害・女装家	『今が楽しい。』 ～そう思えるまでの道のり～	○	○		○	○
本E	#ひきこもり	失敗しても成功しても「さすが俺！」	○	○	○	○	○
本F	#双極性障害・発達障害	好きから繋がるコミュニティ		○	○		○
本G	#中途四肢麻痺	まいらいふ ー交通事故から自立生活センターの創設へー	○		○	○	
本H	#中等度感音難聴	わたしの聞こえの世界		○		○	○
本I	#中途失聴・難聴	後ろから話しかけないで！ ～顔を見合せて話しましょう♪～	○		○		○
本J	#適応障害・うつ病	うつ病で2年間のひきこもり ー救ってくれたのは1匹の猫!?ー	○		○	○	
本K	#発達障害・パンセクシュアル	誰でもマイノリティになる可能性があるから	○			○	○
本L	#不定性 X ジェンダー・パンセクシュアル	カノンのおはなし		○	○		○
本M	#難聴と弱視	見えにくく、聴こえにくい	○	○		○	
本N	#シングルマザー・生活保護制度・発達障害	悩んでいるあなたに届け、私の生き方		○		○	○
本O	#自閉症スペクトラム	当てはめて決められる障がいはあるのか	○		○	○	
本P	#脳性まひ・車椅子	身近なひとの理解がほしい ー自立への一歩ー	○	○		○	
本Q	#軽度知的障がい・解離性同一性障がい	私の体はシェアハウス ーときどき年上。あとは下ー		○	○		○
本R	#乳がんサバイバー	生きることしがみついで	○		○	○	
本S	#統合失調症	今だから話せること		○	○		○

³ ヒューマンライブラリー 2023あらすじ (chrome-extension://efaidnbnmnibpcjpcglclefindmkaj/https://www.n-seiryu.ac.jp/cms/wp-content/themes/seiryu/images/page/extension/ec/course_info_20231105_synopsis.pdf)

⁴ 当日の様子は「にいがた経済新聞」(https://www.niikei.jp/877790/)にて紹介されている。

今回のヒューマンライブラリーは4年ぶりに参加申し込み・対話の事前予約なしでの開催となった。「読者」はあらかじめホームページに掲載された「あらすじ」を読むか、当日会場に掲示された「あらすじ」を読み【写真7】、セッション開始前にその都度受付で「本」を予約し、対話に入る。「読者」の数は1セッションにつき原則4名まで、聴覚障害のある「本」は筆談のコミュニケーションに時間を要するため3名までとした。

当日の「学生司書」の役割は会場設営、受付、会場案内、書庫（「本」の休憩室）の見守り、対話の見守りなどがある。基本、「学生司書」が対話に参加することはないが、時間管理も含め、常に全体を見回り「本」にとっても「読者」にとっても安全で安心な環境で対話が行われているか見守りを行った。前述の聴覚障害のある「本」との対話では筆談でのコミュニケーション方法などUDトーク⁵を使いながら「本」と「読者」に説明するなど、ある程度のファシリテーターとしての役割を果たした。また、セッションに空きがある場合は「学生司書」も一「読者」として対話に参加した。

対話セッション終了後の16時15分から17時までは「本」「読者」の希望者と「学生司書」50名以上が参加し、ふりかえり会を開催した【写真8】。ヒューマンライブラリーに参加した「本」「読者」「学生司書」がそこで何を感じたか、自身の考えがどう変化したかなど自己内省する機会としてふりかえり会は重要である。ここでは「本」「読者」を4～5名程度のグループにわけ「学生司書」がファシリテーターとして各グループに参加した。また聴覚障害のある「本」のグループには情報保障としてパソコン要約筆記者が2名ずつ入った。まずはヒューマンライブラリーに参加した感想を共有した後、司会進行を務める筆者より、「明日からのあなたの『第一歩』はどんなこと？」という問が投げられ、ヒューマンライブラリーに参加したことによって自分の中に起こった変化についてグループで対話を行い、最後に会場全体で共有した。ここでの詳細は後述する。

【写真7】



【写真8】



4. 多文化共生社会を生きるためのスキル

4-1. ヒューマンライブラリーの効果

ヒューマンライブラリーにおいては、「本」が肯定的な自己概念を構築するナラティブ効果（横田 2018b）、企画・運営に携わった学生のアクティブラーニング面での効果（工藤 2012、横田 2018a）などが報告されている。そして「読者」においては異文化間能力育成の効果も次のように報告されている。

⁵ UDトークはコミュニケーションの「UD=ユニバーサルデザイン」を支援するためのアプリで、音声認識で声を文字化する機能がある。(https://udtalk.jp/)

ヒューマンライブラリーの対話とヒューマンライブラリー後のふりかえり会を通して「読者」は「新しい知識」と「寛容性・柔軟性」というスキルを獲得し、偏見カテゴリーの「再カテゴリー化」が生じ、対象となるカテゴリーへの「偏見の低減」が見られ、自身と他者の「関係の再構築」という最終的な行動態度の獲得に繋がる。(坪井 2016、横田、坪井、工藤 2018)。宮崎 (2023) は、ヒューマンライブラリーを異なる人間同士が対話を通して社会的認識を新しく築いていくナラティブ・アプローチの実践であるとし、それにより新たな人間関係が構築される場だと述べる。実際に筆者が開催したヒューマンライブラリーのアンケート調査からも、「読者」が新しい知識を獲得し、物の見方の新たな枠組みを構成し、対象である「本」に対し親近感や敬意を持つことで関係性に変化が生じることが報告されている(関、岩森、池宮 他2019、関 2020、2023)。このように複数の先行研究からもヒューマンライブラリーが「読者」の寛容性を高め、固定観念や偏見を低減させる効果が認められている。こうしてこれまでは「読者」の中に偏見への低減へ向かう変容が生じたことに着目してきた。しかし、もしそこに達することのできない「読者」がいた場合、ヒューマンライブラリーに参加したことはその「読者」にとって無益であったのだろうか。次に、ヒューマンライブラリーの意義を今までとは違う視点から論じる。

4-2. 葛藤と哲学的問

ヒューマンライブラリーは対話を基本とする取り組みである。地域でも対話カフェ、哲学カフェ、対話型鑑賞といった対話活動が盛んに行われている。対話とは、価値観が違う者同士が互いの考えや想いを共有しながらすり合わせをし、自身の中の価値基準そのものを問い直す行為である。当然自身の考えが変化していくこともあり、その変化を肯定的に受け入れていく過程でもある。ヒューマンライブラリー終了後に開催したふりかえり会で『『本』との出会いがあなたに与えた影響ってなんだろう』『ヒューマンライブラリーが明日からあなたの行動に何か変化を及ぼすとしたらどのようなことだろう』という問に対し、「自分はまだ踏み出せない、踏み出して何かを変えていく勇気がない、どうしたら勇気を持てるのだろう」と涙ながらにその葛藤を語った「読者」がいた。この「読者」は複数の「本」と対峙することで自身の価値基準が揺らぎ、またふりかえり会で他の参加者が次々と「変化」について述べる中、「変わりたい自分」と「変わらない自分」という思いが相克したのだろう。しかしこの「読者」にとってヒューマンライブラリーがここで終わったのではない。重要なことは、「なぜ自分は踏み出せないのか、どうしたら一歩踏み出せるのか」という問を持ち帰り自身に問い続けること、自身と対話し続けることで、新たな価値観の形成に繋がる。ヒューマンライブラリーはそのような、ある種の哲学的問が生まれる場でもある。そして簡単に答えの出ない問について葛藤しながらも考え続けること、これは後述するネガティブ・ケイパビリティに繋がっていく。

4-3. 「理解できない」ことを肯定的に捉える

またヒューマンライブラリーを複数回経験した「学生司書」から「すぐに『本』をすべて理解できなくてもいい。自分もすぐにはできなかつた。でも自分がそうであったように、いつか『ああ、そうなのか』と理解できる日が来るかもしれない」というコメントがあがった。数土 (2001) は著書の中で、理解できない他者との共存について述べている。我々が相互理解に固執するのは、他者と相互理解できないということはその他者を排除することだと感じているからだと言う。そして無条件に他者に寛容になることは、究極的には他者の存在意義を否定してしまうことだと述べる。それよりも「話し合えば理解できる他者」ではなく、むしろ「理解できない他者」であるという事実を受け入れ、理解しないまま共存する可能性について論じている。これは一見ヒューマンライブラリーの目指すところと乖離しているよう

に思われるが、多文化共生社会を生きるための戦略として非常に重要な点である。コメントをした「学生司書」は、最終目的は相互理解にあるにせよ、「理解できない」ということに悲観的にならず、むしろそれを肯定的に捉えることができるようになっていた。ヒューマンライブラリーは時として「理解できない他者」と対峙する場であってもいい。そして「理解できない他者」を理解できないものとして受け入れるという「寛容さ」を養う場でもある。

4-4. ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)

現代教育が養成するものはポジティブ・ケイパビリティ (positive capability)、すなわち問題解決のための教育である。問題を見つけ出し、あるいは設定し、それを解決するための「解答」を見つける能力を養う。そしてそこで求められるのは、できるだけ早く問題を解決することである。しかしあまりにも問題を解決することだけに焦点を置くと、複雑な問題も単純化され、その解答は机上の空論となる。さらにその解決法が見つからない場合は、そこから逃げ出すか、あるいは最初からその問題を避け対峙しようとしないう可能性が示唆される (帚木 2022)。

一方、ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)とは英国人詩人John Keatsが19世紀に提唱した概念で、「どうにもこたえが出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」、あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」を意味する (帚木 2022, p.3)。そして他者理解においてもこのネガティブ・ケイパビリティが重要な役割を果たす。相手を真に理解したいと願う時、安易に共感し分かったつもりになるのではなく、本当に理解しているのか、本当は理解していないのではないかと立ち止まって考えることが必要である (谷川、朱、杉谷 2023)。

ネガティブ・ケイパビリティは多様なもので溢れた不確実な社会で生き抜くために我々に必要な能力であり、ヒューマンライブラリーはこのネガティブ・ケイパビリティを養う場にもなり得るのではないか。もちろんヒューマンライブラリーの第一義は相互理解や偏見の低減であることに揺らぎはないが、同時に簡単に「共感した」と結論付けることを敢えて押しとどめ、自分とは異なる背景を持つ「本」を、その背景も含めてどこまで理解できたのか、懐疑的に自分に問い続けていくことも重要である。そして多様な価値観と遭遇したことで湧き上がる違和感から逃げず、それを新たな問として考え続けていくこと、考え続けられることが多文化共生社会を生きる我々に必要な能力なのではないだろうか。

5. おわりに

本稿ではまず2023年度の学生司書プロジェクト活動とヒューマンライブラリーの実践について報告した。コロナ禍における数年間の条件付きヒューマンライブラリーを経て、ようやく通常の形で開催することができ、20名の多様な背景を持つ「本」の協力のもと、多くの「読者」が参加し無事終えることが出来た。学生司書プロジェクトも学内の勉強会だけでなく学外でより多くの人と関りながら学ぶ機会も定着してきており、また「学生司書」OGとの繋がりも現役「学生司書」にとっては刺激となっている。

次に、ふりかえり会での「変わらない」「理解できない」という参加者のコメントを取り上げ、新たな視点からヒューマンライブラリーが多文化共生社会を生きる我々に必要なスキルを養う場になり得るか論じた。今までは「相互理解」「自己変容」「偏見の低減」といった本来ヒューマンライブラリーで想定される効果について着目してきたが、そこに到達できなくとも、到達できないからこそその学びも重視し、その学びの価値をさらに探求していくこととする。

青陵社会連携センターでは引き続きヒューマンライブラリーを開催する予定である。また個人や団体でもヒューマンライブラリーを開催したいという声があがっており、すでにいくつかの協力要請を受けている。今後もヒューマンライブラリーの実践と普及に努めるとともに、真の多文化共生に近づくためにヒューマンライブラリーがどのようにそれに資することができるのか、その可能性を探っていきたい。

引用、参考文献

- 工藤和宏. (2012). 多様性と共に生きる—「ヒューマンライブラリー」の運営を通じた「社会人基礎力」成長の物語. 獨協大学英語研究, 71, 99-118.
- 関 久美子, 岩森三千代, 池宮真由美, & 佐藤裕紀. (2019). ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果: 多様性の理解を目指す試みとして. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 49, 25-41.
- 関久美子. (2020). ヒューマンライブラリーの実践と今後の課題. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 50, 115-128.
- 関久美子. (2023). コロナ禍での対面ヒューマンライブラリーの実践と青陵学生司書プロジェクト. 新潟青陵大学短期大学部研究報告, 53, 57-69.
- 数土直紀. (2001). *理解できない他者と理解されない自己 寛容の社会理論*. 勁草書房.
- 谷川嘉浩, 朱 喜哲, & 杉谷和哉. (2023). *ネガティブ・ケイパビリティで生きる —答えを急がず立ち止まる力*. さくら舎.
- 坪井 健. (2016). ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力—コンピテンシーを育てる実践の立場から. (特定課題研究『異文化間能力を考える—多様な視点から』発題) 異文化間教育学会第37回大会.
- 松下佳代 (Ed.). (2015). *ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために*. 勁草書房.
- 帯木蓬生. (2017). *ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力*. 朝日新聞出版.
- 宮崎聖乃. (2023). 「ヒューマンライブラリー」の再定義の試み—ナラティブ・アプローチの実践と設置としての「図書館」—. 共生学ジャーナル, 7, 69-88.
- 横田雅弘. (2012). ヒューマンライブラリーとは何か—その背景と開催への誘い. 加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏 (Ed.). *多文化社会の偏見・差別: 形成のメカニズムと低減のための教育*. 明石書店. 150-171.
- 横田雅弘. (2018a). ヒューマンライブラリーで学生は何を学んだのか—「司書」として参加した大学生のレポートから. 坪井 健・横田雅弘・工藤和弘 (Ed.). *ヒューマンライブラリー: 多様性を育む<人を貸し出す図書館>の実践*. 明石書店. 248-271
- 横田雅弘. (2018b). ヒューマンライブラリーの可能性「読者」と「司書」(学生)の学びを中心に. 言語文化教育研究, 16, 248-271.
- 横田雅弘・坪井 健・工藤和宏. (2018). ヒューマンライブラリーの偏見低減効果—アンケート調査による分析. 坪井 健・横田雅弘・工藤和弘 (Ed.). *ヒューマンライブラリー: 多様性を育む<人を貸し出す図書館>の実践*. 明石書店. 210-247.